

フォーラム

特定非営利活動法人 奈良 21 世紀フォーラム会報

2022年
新春号
No.38

ニュース

◇ 2021 年実施の主な事業

6月26日 令和3年度理事会・通常総会開催

10月23日 第12回大仏書道大会の開催
～24日

11月17日 創建・復興の2人の人物から西大寺を見る



年頭のご挨拶

新年あけましておめでとうございます。

昨年中は多大なご理解とご協力を賜り心より感謝申し上げます。本年が会員皆様にとりまして健康で輝かしい年になりますよう、心からお祈り申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の世界的拡大から2年が経過しましたが、新たな変異株の感染が世界で広がり、原材料価格の高騰や輸送の停滞などによる物価の上昇等、出口が見えない閉塞感が続いております。

当フォーラムにおきましては、2000年（平成12年）に奈良の文化資源を活かし地域文化の振興と活性化に寄与することを目的に設立され、本年で設立22周年を迎えることができました。設立以来取り組んできた「万葉蹴鞠の復元」「書の文化の伝承」「県内の歴史文化の探訪」「県内企業の企業文化・企業風土の調査と紹介」「吉野川源流の水源地の森を守る活動支援」などの活動も、コロナ禍により思うように実施できていないのが現状ですが、各関係先のご理解とご協力のもと、感染症防止策を講じることで、昨年10月に「大仏書道大会」、11月に「奈良の歴史文化資源の探訪」など、徐々に活動を再開し、無事実施することができました。これもひとえに会員ならびにこれら活動にご協力くださった皆様方のご支援の賜物と深く感謝申し上げます。

今後の活動につきましては、定着してまいりました「春日大社奉納蹴鞠」、「大仏書道大会」につきましては本年も実施を予定しており、その他の事業につきましても、新型コロナウイルスの感染状況を注意深く見据えながら、臨機応変な対応で実施したいと考えております。日本の歴史・文化の発祥の地「奈良」において意義ある事業を展開、推進し、奈良から明るい情報発信ができるよう積極的に取り組んでまいります。

会員皆様の変わらぬご理解とご支援をお願い申し上げます。

（2022年1月吉日）



理事長 植野康夫

令和3年度理事会・通常総会開催

—活動実施の方針・事業計画を決定—

令和3年度理事会・通常総会の開催については、本年も新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う政府の緊急事態宣言等を踏まえ、感染症拡大防止の観点から書面議決や委任での参加をお願いし、少人数での開催とさせていただきました。

○令和3年度通常総会の開催

令和3年度の通常総会は6月26日（土）、奈良市三条町の奈良21世紀フォーラム事務所に於いて開催し、令和2年度の事業報告と決算の承認、令和3年度の活動実施の方針、事業計画及び予算を決定しました。役員選任の結果、新たに桑原克仁氏、澤田啓二氏、高田知彦氏、中田紀子氏、西川恵造氏、林信氏、米田昭正氏が理事に就任され、任期満了により猪熊兼勝氏、岡橋清元氏、岡村元嗣氏、畷川安雄氏、豊澤安男氏、中畷實男氏、長谷川俊彦氏、丸山隆司氏、森下泰行氏、山崎理氏、山本太治氏、吉田昌功氏が理事を退任されました。

◇活動実施の方針

奈良県の歴史文化とそれを取り巻く自然環境の魅力を再発見し、奈良県の活性化に結びつく提案活動を行う。まず伝統的芸能文化として定着しつつある「万葉蹴鞠」の紹介に努める。また奈良県内の伝統行事の紹介ほか、奈良県の観光立県としての持続的な観光振興のための取り組みに積極的に協力する。そのほか、奈良県に根をおろし、発展し続ける企業の伝統、文化、経営理念と、奈良の風土とのかかわりを調査、記録し、県内で活躍する企業を県内外に紹介する。まちづくり等を支援する企画事業の提言・提案事業は、川上村で実施される「源流まつり」等に協力する。

◇令和3年度の事業計画

- ①「万葉蹴鞠」の復元
 - ・春日大社奉納蹴鞠として実施する
- ②「書の文化」の伝承
 - ・東大寺の協力を得て大仏書道大会を開催する
- ③「奈良県内の歴史文化資源」の探訪
 - ・奈良県内の神社仏閣をはじめとする文化資源を顕彰し、新たな視点で紹介する
- ④「奈良県企業の企業文化、企業風土」の調査、紹介
 - ・奈良の風土に生まれ成長するユニークな企業を対象に企業見学会を実施する
- ⑤「吉野川源流の水源地の森を守る活動」支援
 - ・川上村の自然、歴史文化を体験するバスツアーの実施、源流まつり等への協力



2021年1月から12月に実施した事業

1. 書の文化の伝承

◎第12回大仏書道大会「書くことは楽しい in 奈良」を開催

実施日 令和3年10月23日（土）～24日（日）

会場 東大寺大仏殿西回廊

10月23日（土）から24日（日）の2日間、東大寺大仏殿西回廊に於いて「第12回大仏書道大会」の書道展を開催しました。本年も、コロナ禍での開催となり、三密を避けるなど感染拡大防止策を講じての開催となりました。

当書道展は、平城遷都1300年を記念して開催以来毎年実施しており、今年で第12回目を迎えました。単なる教科書的な技術だけではなく、自由な感性、創造性や味わい深さなども加味し、書の可能性を感じさせるような作品に光をあてる稀有な大会として、全国から毎年多数の応募をいただいています。今回もコロナ禍で学校の行事日程の変更や部活動が制限されるなど、作品の募集に大きな影響が出るものと案じられましたが、関係する多くの方々のご協力もあり、全国80の高校・大学から1,178点の応募を頂くことができました。

同書道展にさきだち10月3日には、朝日新聞社奈良総局において森本公誠・東大寺長老（当フォーラム理事・特別顧問）を審査委員長に迎え、高校や大学の書道教員の方々に審査に携わっていただき、7点の特別賞と93点の入賞作品を選定しました。

筆で書く楽しさが伝わってくる作品、若者らしい意欲的で力強い作品など個性を發揮した作品が数多く見られました。また、優れた作品を多数応募された団体に贈られる奨励賞には、兵庫県立小野高等学校、明照学園樹徳高等学校の2校が選ばれました。今年も受賞作品100点を大仏殿西回廊に展示し、入選者や学校関係者をはじめ参拝客や観光客の方にも観覧していただき、650名余りの来場を得ました。

なお、24日に開催を予定しておりました席書会は新型コロナウイルス感染拡大防止策として、三密を避けるため、関係者と協議し中止いたしました。

展覧会（大仏殿西回廊）



審査会（朝日新聞社奈良総局）



☆特別賞7点の紹介



奈良県知事賞「飛躍」

濱下 陽さん（埼玉県立越ヶ谷高等学校）

私たちは紙からはみ出してはいけない、曲がってはいけない、印は左の下の方と思いがちです。この作品の作者は、このようなことに囚われず、言葉のイメージを膨らませ、自分にしか書けない「飛」を書く、そんな自己表現に挑みました。メタリック墨液を使っています。縦線をより強調するために他の点画を上部に集中させ、左右に広い余白を作りました。印もあえて片向けましたね。ブラヴォー～！



奈良県教育長賞「道」

三村 竜雅さん（新潟県立新津南高等学校）

穂先の長い柔らかい筆（羊毛長鋒）の上部を持って書いたのでしょう。書き易い剛毛筆では出ない躍動した線になりました。禅宗の始祖とされる達磨の絵は表情豊かで、書の線同様にいきいきとした線で描かれています。「七転び八起き」を連想させ、卒業を前にした作者の気迫が伝わるようです。お気づきでしょうか、右下のピンクの点です。なくてはならない効果的なものとなっています。



奈良市長賞「ときには、のんびりゆったり、のほほんど」

長谷川 そらさん（新潟県立新津南高等学校）

クルリと回転する二つの「の」、文字通り全体にゆったりとした書きぶりです。筆圧の強弱が自由自在で、線の太細、文字の大小が自然に表現され、平仮名ばかりとは思えない変化に富んだ書になりました。言葉に対応するようにほほ笑むおじごう様は淡墨です。上部に描かれているのは祠の屋根でしょうか、錫杖のくるくるした線もリラックスした筆使い、キャンディーのようでいいですね。詩書画一体となった若者らしい仏画といえるでしょう。



奈良市教育長賞「蓮の花と共に」

臼井 ゆうさん（静岡・浜松啓陽高等学校）

軽快なタッチで描かれた淡い色調の下絵、その花の芯を避けてご自分の言葉を変化のある「散らし書き」で綴りました。日本の未来に願いを込めた簡素な文、その最後に「祈願」の二文字が加わり、名前は小さく入れた好感の持てる作品です。絵と書を一つの世界として構成する力があり、まとまっています。きっとよい世の中がやってくる、そんな希望の風が吹いているようです。



東大寺賞「私の佛を育てたい」

徳政 あいかさん（広島県立日彰館高等学校）

作品づくりにあたっては先ず「何て書こう…」と頭を悩ませますね。「自分の仏、心の中の仏を育てたい」こんな文言が出てきたことに感動です。森本長老は、聖武天皇もこのようなことを説いておられる、と「東大寺賞」に選ばれました。このサイズに一行書きは収まりにくいものですが、旧字体の「佛」を用い、蓮弁を抽象化した淡墨の丸の上に大きく座らせました。そんな工夫によって非凡な一行書きとなりました。



朝日新聞社賞「鴻志」

大野 詩織さん（京都・花園大学）

「鴻」は大きな鳥のことです。大きな志(挑戦)という思いを紙面いっぱいにぶつけましたね。大学生の作者は「隸書」を学んだのでしょうか。その中でもより自由な「木簡」の筆法を用いました。中央に力強く伸びた線は空間をかかえ込み、堂々としています。用具用材の選択は大事です。作者は太く柔らかい筆を選び、その機能を発揮しました。逆筆に筆を扱い、筆は開き割れたようになった筆跡から、作者の意志が伝わってきます。



奈良 21 世紀フォーラム理事長賞「ソーシャルディスタンス」

池田 野乃花さん（静岡県立静岡城北高等学校）

短い文は自由律俳句かキャッチコピーのようでもありコロナ禍ならではの願いが詰まっています。書き出しを下げ「あ」の下に余白も取って、丸い集団として上部に上手くまとめました。穂先のきいた線は美しく特に「め」「あ」「の」の伸やかな曲線が見せ場ですね。2メートルと漢数字(二メートル)でないのが高校生らしく今風です。大仏さんとアマビエがおしゃべりしているのでしょうか。楽しく希望がみえる作品となりました。

2. 「奈良の歴史文化資源」の探訪

◎創建・復興の2人の人物から西大寺を見る

実施日 令和3年11月17日(水)

参加者 14名

大和西大寺駅…西大寺(四王堂・聚宝館・本堂・愛染堂)…八幡神社…
西大寺奥の院…八所御霊神社…秋篠寺

765年称徳天皇が鎮護国家と平和を願って建立した西大寺。東大寺に対し、西の大寺として繁栄したが、平安遷都とともに衰退。鎌倉時代に西大寺中興の祖といわれる叡尊によって復興をはたす。今回はその1,250余年の歴史をたどるとともに二人の人物から西大寺を見た。



西大寺四王堂から本堂へ

小春日和に恵まれた朝10時、大和西大寺駅南改札口に集合。駅よりわずか数分で西大寺東門より境内に入ると、佐伯俊源僧侶が迎えてくださった。まずは境内図による伽藍配置等のご説明をうける。そのあと門近くに建つ四王堂を拝観。

実は四王堂は西大寺の始まりのお堂であり、その歴史は孝謙上皇(後の称徳女帝)が藤原仲麻呂(恵美押勝)の反乱を鎮めるために、四天王像の造立を決めたことに始まったという。

平城京で仏教が貴族を中心に花開いた天平文化も、西大寺は都が平安京に移ると朝廷の援助から遠のき、度々の火災や災害にも再建が進まず急速に衰退。荒廃した西大寺が復興するのは、それから400年後。興正菩薩・叡尊を待たねばならなかった。

叡尊は戒律と仏教を一体のものとして修業する「密・律双修(兼修)」の根本道場として西大寺を復興しようと考えた。釈迦の原点回帰を説いた叡尊が発願した本堂の本尊釈迦如来立像。釈迦を深く信仰する叡尊



西大寺本堂で説明を聞く

一門の根本像として重要なものとされているようだ。

そして、叡尊が眞言律宗一門の最も重要な行事として創始したのが「光明眞言土砂加持大法会」。西大寺で最も大事な行事であるといい、興味深い話の一つだった。

この本堂には灰谷健次郎の小説「兎の目」に出てくる善財童子の可愛らしい小像があり、その前で一部の参加者は中田講師からの説明を聞いた。

次は本堂西側に建つ愛染堂へ。本尊愛染明王坐像は秘仏なのでお前立ちを拝む。叡尊の名を一躍有名にしたのがこの愛染明王坐像なのかもしれない。

弘安の役蒙古襲来の際、叡尊が国家安泰の祈願を行うと暴風雨で蒙古軍は退散せざるを得なかった。この時、愛染明王が持つカブラ矢が西に向かって飛び去り神風を吹かせたという伝承が生まれたという。

蒙古退散を一心に祈祷した叡尊だったがその祈祷の内容は、「東風を以て、兵船を本国に吹き送り、来人の命を損なわずに船を焼いていただきたい」というものだったという。

佐伯僧侶による詳しい説明はここまで。

あとは中田講師が引き継ぐかたちで、本堂前にある東塔跡で説明をうける。記録によると西大寺には東西二つの塔が建てられた。元々は八角七重塔が計画された(柵がめぐらされている芝地の部分が基壇跡)が実際には、その中に残る基壇に四角五重塔が建立され、その高さおよそ24メートルだったという。



西大寺東塔跡

西大寺正門である南門を通り西へ約300メートル、西大寺の鎮守だった八幡神社へ移動する。

実は、大きな茶碗でお茶を廻し飲みする西大寺の伝統行事「大茶盛式」の始まりがこの神社であったこと、そのいきさつと茶碗で廻し飲みするのは「一味和合」という戒律の精神があることなど・・・。

西大寺最後はここより北西10分余りの所にある奥之院、興正菩薩叡尊上人御廟へ。

空を突くように威風堂々とそびえる興正菩薩の五輪塔を前にして、五輪塔の形の意味など詳しく説明を受けた。締めくくりとして、称徳女帝と僧・道鏡の話。そして宇佐八幡宮神託事件、道鏡が身分不相応な皇位を願ったとされる、俗にいう「道鏡皇位覬覦(きゅう)事件」は本当にあったのか、の話など・・・。

西大寺奥之院をあとに、これより約20分の秋篠寺まで歩く。昼食のお弁当は、お寺の隣にある八所御霊神社の境内をお借りしていただいた。

今回の最後を締めくくるのは、文学的趣のある秋篠寺。南門をくぐると樹々の間をうめつくす苔、頭上には樹々が覆い繁り、やがて木の間に見える本堂を取り囲む漆喰の白壁、そのコントラストが美しい。



秋篠寺本堂前で中田講師の説明を聞く

小ぶりながらも端正な本堂、その中に皆があこがれを持ってこの寺を訪れるという伎芸天が本尊横、向かって左に立つ。堂内には長椅子が置いてあり、訪れた人が心ゆくまで仏様と対面できるお寺の配慮が嬉しい。この像を一躍有名にしたのは立原正秋の小説「春の鐘」であると中田講師。小説は冬の奈良に人間の葛藤を映し出した内容となっていることなど、興味深い話とともにこの仏像の見方なども伺った。名残を惜しみながら14時半頃秋篠寺をあとにした。(N.N 記)



追悼・江並一嘉氏

(令和3年1月31日逝去)

第四回大仏書道大会講演会にて
(平成25年10月27日・東大寺総合文化センター)

江並一嘉氏を偲んで

「こんな企画があるのですが」と相談すると「よっしゃ、やろう」と即答が返ってくる爽快な方でした。奈良21世紀フォーラムの専務理事や相談役として一時代を築いて頂きました。活動範囲は大阪にも及び、関西・大阪21世紀協会の「なにわ大阪をつくった100人」の企画でも江並さんが中心になって有志が集まり、数年かけて上・中・下の3巻刊行に結実しました。同じく奈良21世紀フォーラムの「奈良企業人列伝－奈良に息づく風土・産業」の出版も江並さんの抜群の発想と行動力に負うところが多かったと思います。一言にしてすべてを洞察し直ちに行動に移す類い希な大きな人でした。常に好奇心や探求心に充ち、奈良の歴史文化資源の探訪に奥様と一緒に颯爽と参加されていた姿が目につかびます。惜しい人がまた一人彼岸へ旅立たれました。心からご冥福をお祈りいたします。

奈良21世紀フォーラム 特別顧問・理事 堀井良殷



静かな酒

「長谷川さん、今晚一杯どうですか?」「すみません。生憎先約がありまして…」「そう、そしたらまた次に」これが江並さんと交わした最後の会話でした。

江並さんが足を向けるのはいつも旨い酒と肴を出す店に限ります。後輩相手の酒の場はややもすれば講釈や愚痴の場になりがちですが、江並さんは率先して話すでもなく聞くでもなくそうかといってまったく無視するでもなくただひたすら静かに酒と肴を嗜む時間を楽しんでおられたように思います。そこには私たちがフォーラムの場で日頃目にするホットでエネルギッシュな印象からは想像できない別の江並さんがいました。

大分の空港、四日市の料理屋、大阪阿倍野や天満橋で一緒にしたひとときは忘れられません。また身をもって「老いて学べば死して朽ちず」をご教示いただいたことにも深く感謝いたします。ご冥福をお祈り申し上げます。

奈良21世紀フォーラム 元理事 長谷川俊彦



役員名簿

(令和4年1月1日現在)

職名	氏名	職業(経歴)
理事長	植野 康夫	(株)南都銀行 特別顧問
副理事長	谷口 宗男	奈良交通(株) 相談役
特別顧問・理事	森本 公誠	東大寺長老
特別顧問・理事	堀井 良殷	公益財団法人関西・大阪21世紀協会 顧問
理事	上野 誠	國學院大學 教授
理事	卜部 能尚	ウラベ木材工業 代表
理事	扇谷 泰之	(株)シードコンサルタント 相談役
理事	花山院弘匡	春日大社宮司
理事	榎木 康雄	新日本料理材料研究会 主宰者
理事	菊池 攻	奈良トヨタ(株) 取締役社長
理事	久保 昌城	竹茗堂 左文 代表
理事	桑原 克仁	近鉄ケーブルネットワーク(株) 取締役社長
理事	小山 新造	小山(株) 取締役会長
理事	近東 宏佳	共同精版印刷(株) 取締役社長
理事	澤田 啓二	元東大寺学園中・高等学校教諭
理事	高田 知彦	奈良中央信用金庫 理事長
理事	高松 啓二	(株)近鉄百貨店 取締役会長
理事	中井 隆男	大和ガス(株) 取締役会長
理事	中田 紀子	エッセイスト
理事	西川 恵造	(一財)南都経済研究所 理事長
理事	林 信	近鉄グループホールディングス(株) 取締役常務執行役員
理事	森本 俊一	三和澱粉工業(株) 取締役会長
理事	米田 昭正	KNT-C Tホールディングス(株) 取締役社長
専務理事(事務局)	中村 優造	元新若草山自動車道(株) 取締役社長
監事	中畷 大	中畷大会計事務所 所長
監事	福嶋 重博	奈良県サッカー協会 名誉会長

(50音順)

2022年1月発行

編集 加古哲理

発行 NPO 法人 奈良二十一世紀フォーラム

〒630-8244 奈良市三条町 511-3 奈良交通第2ビル